

駒澤大学 仏教学部禅学科・文学部心理学科・経営学部商学科・法学部法律学科 2013
過程の演習 新国語問題集アシスト【古文編】

次の文章は、この世の中の大切なものについて語り合っている場面を記したものである。これを読んで、後の問に答えよ。

「花、紅葉をもてあそび、月、雪に戯るるにつけても、この世は捨てがたきものなり。情けなきをもあるを嫌はず、心なきをも数ならぬをも分かぬは、かやうの道ばかりにこそはべらめ。それにとりて、夕月夜ほのかなるより、有り明けの心細き、折りも嫌はず、ところも分かぬものは月の光ばかりこそはべらめ。春、夏も、まして秋、冬など月明かき夜は、そぞろに心なき心も澄み、情けなき姿も忘れられて、知らぬ昔、今、行く先も、まだ見ぬ高麗^{*こま}、唐土^{*もろこし}も、残るところなく遙かに思ひやらることは、ただこの月に向かひてのみこそあれ。されば、王子猷^{*わうしいう}は戴安道^{*たいあんだう}を訪ね、簫史^{*せうし}が妻の月に心を澄まして雲に入りけむも、ことわりとぞおぼえはべる。この世にも、月に心を深く染めたるためし、昔も今も多くはべるめり」と言ふ人あり。

また、「この世に、いかでかかることありけむ、とめでたくおぼゆることは、文にこそはべるなれ。『枕草子』に返す返す申してはべるめれば、こと新しく申すに及ばねど、なほいとめでたきものなり。遙かなる世界にかき離れて、幾年あひ見ぬ人なれど、文といふものだに見つれば、ただ今さし向かひたる心地して、なかなかうち向かひては思ふほども続けやらぬ心の色もあらはし、言はまほしきことをもこまごまと書き尽くしたるを見る心地は、めづらしくうれしく、あひ向かひたるに劣りてやはある。つれづれなる折り、昔の人の文見出でたるは、ただその折りの心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。まして亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月の多く積もりたるも、ただ今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。何事も、たださし向かひたるほどの情けは、かりにてこそはべるに、これはただ昔ながらつゆ変はることなきも、いとめでたきことなり。いみじかりける延喜^{*えんぎ}、天曆^{*てんりやく}の御時の古事^{*ふること}も、唐土^{*てんちく}、天竺^{*てんぢく}の知らぬ世のことも、この文字といふものなからましかば、今の世の我らが片端もいかでか書き伝へましなど思ふにも、なほ、かばかりめでたきことはよもはべらじ」と言へば、また、「何の筋と定めていみじと言ふべきにもあらず、あだにはかなきことに言ひ慣らはしてあれど、夢こそあはれにいみじくおぼゆれ。遙かに跡絶えにし仲間れど、夢には関守も強からで、もと来し道もたち帰ること多かり。別れにし昔の人も、ありしならの面影を定かに見ることは、ただこの道ばかりこそはべれ」など言ふ人あり。

*高麗、唐土⇨朝鮮半島や中国大陸のこと。

*王子猷は戴安道を訪ね⇨王子猷は、月の美しい夜に、ともに月を賞美しようと親友の戴安道を訪ねた、という中国の話。

*簫史が妻の月に心を澄まして雲に入りけむ⇨簫史の妻は、夫とともにいつも月を愛してながめていたところ、ある夜、鳳凰^{ほうおう}が舞い降りて、二人を乗せて雲の中に飛び去った、という中国の話。

*延喜、天曆の御時だいご||醍醐天皇と村上天皇の御代。いずれも理想的な治世たと讃えられた。

*天竺てんてく||インドの古称。

*関守も強からで||関守は関所の番人。ここでは恋路を邪魔する者のこと。

*もと来し道もたち帰ること||ここでは、昔の恋の思い出が夢の中で見られることをいう。

問 次のア、オの中から、本文の内容に合致しているものを一つ選べ。

ア 夕月夜がほのかに出ていることをはじめとして、有り明けの消えそうな月が心細くあわれを誘うというように、月は時や場所に限定されずに賞美できる。

イ 月の美しい夜には、過去、現在、未来すべてを見通すことができるばかりでなく、普段は見ることができない高麗や唐土も遙か彼方に見ることができ。

ウ 今は亡き人の手紙を見ると、たいそうしみじみとした思いにとらわれ、歳月が経っているのも忘れ、今すぐにも筆を濡らして返事を書きたい気持ちになる。

エ 人と面と向かっている間の思いはその場限りで消えてしまうが、手紙に書かれたことは昔のままでも少しも変わらず、無常の世に不変のものがあることを教えてくれる。

オ 夢に昔の恋人が現れる時には、恋の邪魔をした者までが現れるため悲しい気持ちになるが、恋人は昔の面影そのままにはつきりと見ることができるのでうれしくなる。

【解説】

◇本文の構成

この世で捨てがたいもの

第一段落

①月

時・場所を区別しない月光

中国でも日本でも月に心を奪われた例が多い

第二段落

②手紙

『枕草子』でも述べられたようにすばらしい

長年会っていない人からの手紙⇨直接向き合うよりも気持ちが伝わる

亡くなった人⇨たった今書いたように思い出される

文字によって時間・空間を超えて気持ちが伝わる

③夢

恋に邪魔も入らず昔の思い出がよみがえる

亡くなった人⇨生前の面影をはっきりと見られる

【現代語訳】

「花や、紅葉を鑑賞して味わい、月や、雪を見て楽しむにつけても、この俗世は捨てるのが難しいものである。風流心がない人をもある人をも区別せず、風流心がない人をももの数にも入らない人をも差別しないのは、このような情趣方面だけでしよう。そういう点で、夕方の月でほんのり出ているのから、有明の月でしみじみと寂しいのまで、時節も区別せず、場所も区別しないものは月の光だけでしよう。春、夏も、いうまでもなく秋、冬など月の明るい夜は、おのずから趣を理解しない心も清らかになり、風流心がない姿も自然と忘れられて、知らない過去、現在、未来も、まだ見たことのない朝鮮半島や、中国大陸も、残るところなく遙かに自然と思いやられることは、ただこの月に向かい合う時だけである。だから、王子猷は、月の美しい夜に、ともに月を賞美しようとする戴安道を訪ね、簫史の妻は、夫とともにいつも月を愛してながめていたところ、ある夜、鳳凰が舞い降りて、二人を乗せて雲の中に飛び去ったとかいう（中国の話）も、もっともなことと思われます。当代（の日本）でも、月に心を深く引かれてしまった例が、昔も今も多くあるようです」と言う人がいる。

加えて（別の一人が）、「この世に、どうしてこのようなことがあったのだろうか、とすばらしく思われるのは、手紙であるようです。『枕草子』に（手紙のことは）繰り返し繰り返し申し上げているように、改めて申し上げるに及ばないけれども、やはりたいそうすばらしいものである。遠く離れた土地に離れ（住んで）、何年も対面していない人であっても、手紙というもののさへ見てしまつと、たった今向かい合っている気持ちが出て、かえって直接顔を合わせては（相手）思うようには（言葉）続けることができない（⇨表現できない）内面も表現し、言いたいことをもこまごまと書き尽くしてある手紙を見る気持ちは、すばらしく喜ばしく、向かい合っている時に劣っているだろうか、いや、劣ってはいない。所在なく退屈である時に、昔知り合っていた人の手紙を見つけた時は、ただその時の気持ちになって、たいそう喜ばしく思われる。まして亡くなった人などが書いたものなどを

見るのは、たいそうしみじみと心打たれ、長い年月が経っているのに、たった今筆を濡らして書いたようであるのが、重ね重ねすばらしい。何事も、ただ向かい合っている間の思いやりは、一時的ですが、手紙はひたすら昔のままでも少しも変わることがないのも、たいそうすばらしいことである。理想的な（治世と讃えられた）醍醐天皇と村上天皇のご治世の故事も、中国、インドという知らない世界のことも、もしもこの文字というものがないとしたら、今の世の私たちの（気持ちの）ほんの一部もどうして書き伝えることができようか、などと思うにつけても、やはり手紙ほどすばらしいものはまさかないでしょう」と言うと、さらに（別の人が）、『どの方面と決めてすばらしいと言うこともできず、頼みにならずあつけないこととして言い慣らわしているけれども、夢こそがしみりと感銘深いものと思われる。遠い昔に行き来が絶えてしまった男女の仲であっても、夢では恋路を妨げる関所の番人も邪魔できず、昔の恋の思い出が夢の中で見られることも多い。別れてしまった故人でも、昔のままの面影をはっきりと見ることは、ただこの夢の方面だけです』などと言う人がいる。

【解答】

ア

「夕月夜ほのかなるより、…ところも分かぬものは月の光ばかりこそはべらめ」を正確にまとめているアが○。

イは「高麗、唐土も、残るところなく遙かに思ひやらるる」を、「高麗や唐土も遙か彼方に見ることが出来る」とするのが×。

ウは「ただ今筆うち濡らして書きたるやうなる」を、「今すぐにも筆を濡らして返事を書きたい気持ちになる」とするのが×。

エは「無常の世に不変のものがあることを教えてくれる」が本文にない記述で×。

オは「夢には関守も強からで」を、「恋の邪魔をした者までが現れる」とするのが×。

【作品（作者）解説】

現存する最古の文芸評論で、一二〇〇年から一二〇二年の間に、藤原俊成としなりのむすめ女むすめによって書かれたという説が有力。『大鏡』の会話形式にならったものといわれ、老いた尼僧が、東山の最勝光院さいしよつこういんに参詣した後で泊まったある家の、三、四人の若い女房たちと語り合ったという物語的结构をとっている。序・物語の批評・歌集の批評・女性の批評の四部構成である。